

DMS P/FU (DWIDP) JICA 便り

ネパール自然災害軽減支援プロジェクト・フォローアップ（水資源省治水砂防局）

No. 22 / 2006.6.30

カトマンズでは、夕方に大雨が降ることが多くなっています。職場から帰る際に大雨になると道は川のようになりますし、路地は一日中ぬかるみの状態です。雨期のカトマンズからはヒマラヤの山々は全く見ることは出来ませんが、雨が降ると気温も下がり、日本の梅雨時のようには不快ではなく、また緑がしっとりとして風情があると感じます。



自転車で販売される旬のマンゴー
（パタン、ジャワラケル地区）

今年8月末までのフォローアップ活動期間もあと2ヶ月となり、取りまとめに向け作業に着手したところです。

国内情勢については、6月に入り2日にカトマンズ中心部においてマオイストにより大規模な集会が開かれました。報道によれば20万人が参加（地方からの動員も多数）したとこのことで、マオ派が政府との話し合い等に向けその力を内外に示すものと考えられています。15日には政府とマオ派との第2回目の和平交渉が行われ、7政党党首の参加のものとコイララ首相とマオ派プラチャンダ議長との早期の会談の実施、停戦監視委員会の設置等が決められ、それに従い翌16日にコイララ首相とプラチャンダ議長との会談が実現しました。このサミット会談で、早期の暫定憲法の策定、それにもとづいてマオ派を含む暫定政府を発足させ、その後政府は下院を解散しマオ派は人民政府を解散するなど8項目の合意が成立しました。しかしこの決定に関しては政党との調整が出来ていないとの声も出てきていることなど、今後のマオ派を取り組んだ政府の実現に向けて不安定要素も見られます。

現在、カトマンズにおいてはバンダやゼネストの心配もなく、地方への移動も比較的自由になってきていると感じます。マオ派との交渉そして憲法制定会議選挙が順調に進み、真の安定・平和がもたらされることが期待されます。

我々専門家は安全に十分注意を払いつつ、ネパールの災害の軽減を図り、災害で苦しむ人々が少なくなることを願って活動をしていきたいと思えます。

「地すべり対策計画」セミナーを実施しました

6月7日（木）DWIDPセミナーホールにて「Seminar on Landslide Mitigation Planning」を実施し、日本大使館、JICA事務所はじめ、内務省、灌漑局、道路局、土壌保全局等の関係省庁から参加者がありました。

セミナーでは、5月からDMS P-FUの短期専門家として来ていただいている上田専門家の「Landslide Mitigation Planning Example for Nepal」および上田専門家の指導



上田専門家による発表

を受けた C/P である、DWIDP 地すべり課のトラダール課長 (Dr.Rakesh Man Tuladhar) による「Introduction of Landslide Disaster Warning system in Nepal : A Need」の発表を行いました。上田専門家からは地すべり対策にあたって、地すべりの状態 (残存土塊の有無による区分等) の判断の重要性や、これまでネパールへは技術移転を行ってこなかった抑止工も保全対象の重要性によっては必要

であること、そして警戒避難体制の導入の必要性が述べられました。発表後には活発な質疑がなされ、この分野における関心の高さが伺えました。このセミナーの後、上田専門家は 11 日に日本へ帰国されました。上田専門家にはフォローアップ活動のうちの主要な項目である地すべり対策についての技術移転にあたっていただき、大変お世話になりました。

主な出来事・トピック

ギルバリ地区の現地踏査を実施しました

5 月 31 日 (水) ~ 6 月 2 日 (金) の日程で武士専門家、中川専門家、DWIDP 砂防課のスンダル (Mr.Sundar Prasad Sharma) 技師、レグミ (Mr.Shri Hari Regmi) 監督官、タマン (Mr.Thala Bahadur Tamang) 監督官のメンバーで、モニタリングのためギルバリ地区の現地踏査を実施しました。当地区は DMSP の河川・砂防のモデルサイトであり特に住民参加型のモデルとなっています。これまでその上流域はマオイストエリアとして立ち入りが出来なかったのですが、今回現地踏査が可能となったものです。

現地では当地区の VDC のチェアマンと植生工の責任者である 2 名の女性が同行してくれました。まず斜面の表面流出対策の植生工の現場を踏査しました。

DWIDP の指導・援助のもと住民によって育苗場の運営、樹種の選定・植栽・管理が行われており、レモン



植栽時 (2000 年)



左写真と同じ位置 (2006 年)

やマンゴーなどの換金植物からの収益により見張人が雇用されているとのこと。2000 年に植栽された斜面は十分な植生が回復していました。河川の現場では築堤・護岸工・水制工・植生工などが施工されており、特に水制工は流心を河川中央に導いており効果を発揮していました。築堤沿



水制工施工時 (2000 年)



左写真と同じ位置 (2006 年)

いの植生工は場所による違いはあるものの概ね良好な状況でした。住民参加型はその後の管理も住民によってなされる体制が整えば非常に有効な手法であると考えられます。

愛媛大学小松学長と和田教授らが来ネされました

5月27日～31日の日程で愛媛大学小松学長ご夫妻と同大防災情報研究センターの和田教授（国交省国総研から出向中）他が来ネされ、ネパールの5大学との協定の調印式やカトマンズのサテライトオフィスの開所式を行うとともに、日本大使館・JICA事務所・道路局・DWIDPなどを訪問されました。今後、ネパールにおける地震防災を中心に研究を進めていき、今秋にはカトマンズで国際シンポジウムを実施する予定とのことです。

DWIDPでは武士専門家がDMSP-FUの説明をした後、プラダハン副局長が面会し（バッテリー局長は急用で水資源省に呼ばれ不在のため）その後、和田教授と矢田部教授をマタチルタの災害現場に案内しました。



DWIDP 局長室にて
中央：小松学長ご夫妻

環境の日のイベントでDWIDPの展示を行いました



DWIDP ブース

5月5日～7日の日程で「環境の日」のイベントとして環境科学技術省の主催のもとカトマンズ・ニューバネシヨワールコンベンションホールにて、関係機関による展示が行われました。DWIDPのブースでは、地すべり発生模型、土石流発生装置、各種パネルなどを展示し、NFADによる作文コンクールの冊子およびカレンダーなどを見学者（主に生徒）に配布しました。

フォローアップ活動を進めています

河川災害現場の踏査を実施しました

6月21～23日にかけては、KTM盆地内で事前にスケッチした小規模な河川災害現場を沢山踏査する事が災害復旧事務をより確立したものに出来るとの意見が出され、これに応じて集中して踏査を行った。第四事務所のMishra筆頭技師及び担当技師とのワーク・ショップを進めている内に、現状の高価なギャビオン布設のみを採用する工法よりも、竹・木材・土嚢・玉石を主なる材料にした水防工法を取り入れた簡易な工法がこの国の地方での予算規模や気候にとって有効であり、又自分の土地は自分で守ると言う村落にはどのような工法を応急処理工として技術指導できるかその標本工事をする事を目的に踏査をするようにとの希望も出された。私見としては、現年災か否か、災害の原因は何かを明確にして災害復旧工事の採択否採択を決定する方法を理解される事を期待する一方、現地コミュニティの人々が簡易に自身で復旧し日常生活活動を災害後に早急に確保できる環境を技術的に裏付ける事も必要と思い賛同して作業に入った。



竹柵による低水位用水制工（施工中）



合流点竹柵低水位導流堤

ヘイハチローの「ナマステ、ネパール」コーナー

(還暦を過ぎて、初めての海外、厳しい環境のネパールで技術協力・生活に取り組む「中川平八郎専門家」の「眼」で見た「ネパール」を紹介するコーナーです。)

又、夏がやって来ました。今年の夏は雨が此処カトマンズの街によく降ります。気温は28前後、湿度は40%の中頃を示します。ジッとしていても時々暑く、時々涼しく感じるのは、更年期症状の一つなのかな？と連れ合いが訊きますが、知らん顔をしています。小生も良く解らないのです。この国では“何故ですか？”という事を思うのは健康に良くありません。洗濯物は良く乾きますが、現地の人に聞くと異常な乾季ですとの事。この盆地から離れると、乾季の気候であるとも言っています。

行動制限が無くなり、物流も円滑になりました。“危険情報”が無くなり、出張事前申請も簡単に許可が下りるようになりました。地方へ行くと簡易に造った赤い布を巻いた門が道路を横断して村の出入り口に建ててあったり、良く見える山の頂上には大きな赤い旗が元気良く風になびいています。目付きの鋭い15~20歳位と見える若者男女が何だかんだと言って来、動き出した車の前後には単車が付いてきます。



赤い門(マオイストゲート)

川の被災現場をジャボジャボと測量棒を一人で担いで歩き、川から上がってくると沢山の村人が集まって待っています。時に冷たい清水を差し出して、代表の少年が迎えてくれます(ネワールの習慣)。嬉しくて頂いたのは良かったのですが、二日後からは激しくはない“個室通い”となりました。



災害現場でのひと時

現場からの帰りの車の中で、又昔の小話が出ました。大きな体の象さんの話です。或るとき、象さんがご機嫌良く歩いていました。ドンドン歩いていくと、象さんにとってはとっても狭い道にさしかかったのです。引き返せばいいのに、その象さんは狭い道の向うに行こうと思いました。色々苦勞してやっと大きな頭や胴体は通る事が出来ました。やれやれ通る事が出来るぞ！と思って、最後に小さな尻尾をするりと抜け出そうとした時に、どうしたものかその尻尾が引っかかって通りぬける事が出来ません。これは困ったゾー！という話でした。

編集責任者：武士俊也、長期専門家：中川平八郎

電話：+977-1-5535502 Fax：同-5523528 E-mail：dmspfu@wlink.com.np URL：<http://www.dwidp.org>